2013年サバ類

単位：数量，1000トン、価格，円／kg

年	数量 漁獲	産地	輸入	輸出 生冷	輸出 缶	東京 生	東京 冷	東京 塩干	東京 塩蔵	在庫	加工品 缶	加工品 干	加工品 蔵	加工品 節	消費支出 生(グラム)
24	443.8	388.3	48.3	106.6	4.0	11.8	3.2	2.3	0.4	67.8	36.0	18.1	52.5	12.4	1,250
25	363.9	320.2	55.5	113.2	3.1	11.2	3.3	2.0	0.3	55.2					1,184
%	82	82	115	106	78	96	102	89	74	81	0	0	0	0	95

年	価格 産地	輸入	輸出 生冷	輸出 缶	東京 生	東京 冷	東京 塩干	東京 塩蔵	消費支出 生(円)
24	83	213	86	426	331	482	525	469	1,075
25	108	227	106	463	345	469	533	494	1,059
%	130	107	123	109	104	97	102	105	99

漁獲と資源

25年のサバ類（マサバとゴマサバ）の漁獲量は、36.4万トンで前年（44.4万トン）を下回ったものの、近年の平均（50万トン）には達せず、やや低い水準であった。

マサバ太平洋系群の資源量は、1970年代には300万トン以上の高い水準であったが、1979年以降、時折みられる低いＲＰＳによる加入量の減少と高い漁獲圧によって減少し、2001年には15万トンまで落ち込んだ。その後、2004年級群などの比較的高い加入とまき網操業管理による漁獲圧の低下により増加し、2012年は109万トンであった。親魚量が45万トン以上の1970～1985年では、年々のＲＰＳは比較的安定し、加入量は年変化があるものの高い水準であった。親魚量が45万トンを下回った1986～2011年では、ＲＰＳの変動が大きく、かつ親魚量が少ないために加入量の水準が低下した。2012年の親魚量は47万トンと推定されている。

マサバ対馬暖流系群の資源量は、1970，80年代は比較的高い水準で安定していた。1987～1990年に減少した後、増加傾向を示し、1993～1996年は高い水準に達した。1997年以降、資源量は急減し2000～2007年は低い水準で推移したが、2008年に急増した。その後は横ばい傾向を示し、2012年は60万トンであった。加入量は近年では2004年にやや高い値、2008年にかなり高い値を示した。親魚量は1996年を近年の頂点に2003年まで減少したが、2009年に急増し、2012年は近年ではやや高い値を示した。再生産成功率は1991年以降、比較的高い値を示していて、1995、2004、2008、2010年にかなり高い値を示している。

近年安定している太平洋系群のゴマサバの資源量は、資源量は、1995～2011年はおおむね安定した加入の継続と1996、2004年の高い加入量によって30万トン前後から60万以上に達する高い水準にある。2012年は77.9万トンであった。親魚量はBlimitを大きく上回って推移しており、2012年は32.6万トンとされている。

また東シナ海系群のゴマサバの資源量は1992～2012年に比較的安定して同程度の水準で推移している。近年では、資源量は2005年に18.6万トンと高い値を示したが、その後は減少傾向を示し、2008年は9.5万トンであった。その後はやや増加し、2012年の資源量は14.4万トンであった。加入量は近年では2004年にやや高い値となったが、2005～2008年は減少傾向を示し、2009年以降は３億尾前後で推移している。2004年の高い加入量のため、親魚量は2005年

に増加した。その後は再び減少傾向を示していたが、2010年以降は増加傾向を示している、といわれている。

産地水揚量と価格（継続漁港）

25 年の産地水揚量は、32 万トンで特に常磐・犬吠埼海域と東シナ海での漁の落ち込みを反映し、前年（38.8 万トン）を下回った。

価格は、生産の増加を反映し 108 円で前年（83 円）を上回った。

海域別漁獲量

本年の海域別漁獲量は、太平洋側の道東海域が大きく伸ばしたが、常磐、東シナ海、山陰が低調であった結果、前年を下回った好調であった。道東海域では、巻き網による漁獲(21,513トン)がみられ、釧路にも水揚げされたが、処理能力の問題もあって、八戸港（17,041トン）へかなりの量（半分以上）が水揚げされた。

海域別水揚量

海　域	24年	25年	対比(%)
道　東	2.4	2.7	113
三　陸	56.3	72.3	128
常　磐	106.5	79.4	74
東　海	66.4	58.6	88
薩　南	16.9	15.2	90
東ｼﾅ海	97.1	68.8	71
山　陰	28.5	10.3	36
その他	10.4	13.3	128
合　計	384.6	320.5	83

三陸（単位：1000トン）

月	24年	25年
1	0.1	0.6
2	0.0	0.7
3	0.0	0.2
4	0.0	0.0
5	0.0	0.3
6	0.3	0.5
7	1.9	4.9
8	14.2	9.1
9	21.9	22.3
10	6.4	23.8
11	8.4	4.9
12	3.1	5.1
計	56.3	72.3

MAX：　Ｈ53　69万トン

常磐（単位：1000トン）

月	24年	25年
1	11.9	7.8
2	13.1	9.3
3	5.0	5.4
4	14.8	4.8
5	4.0	2.5
6	8.0	7.1
7	0.0	2.5
8	0.2	0.0
9	0.1	0.0
10	12.6	10.8
11	25.8	14.4
12	11.1	14.8
計	106.5	79.4

MAX：Ｈ６　14.1万トン

東シナ海（単位：1000トン）

月	24年	25年
1	15.6	14.6
2	12.2	5.7
3	7.3	3.4
4	4.9	2.6
5	8.8	3.8
6	2.7	3.6
7	3.4	1.6
8	2.1	5.1
9	3.1	3.4
10	5.9	5.3
11	8.2	7.6
12	22.9	12.0
計	97.1	68.8

MAX：Ｈ８　22.2万トン

山陰（単位：1000トン）

月	24年	25年
1	9.4	3.9
2	2.9	1.3
3	1.0	0.5
4	0.4	0.4
5	0.4	0.1
6	0.3	0.1
7	1.7	0.1
8	0.4	1.0
9	1.6	0.8
10	0.8	0.1
11	2.6	0.1
12	6.9	1.9
計	28.5	10.3

MAX：Ｈ６　14.1万トン

三　陸

本年の三陸の漁は、北上期は昨年よりはややまとまった漁獲で、南下期も10月にまとまった程度であったが、９月主体に道東沖からの搬入が17,000トン（前年6,600トン）程度あり、その結果、昨年をやや上回る漁獲となった。

本年も福島沖合の操業を自粛により震災前とは違った操業となったが、７月下旬に八戸近海でサバの初漁があり、昨年同様12月まで漁獲がみられた。本年も初漁期から10月中旬頃まではゴマサバの混じりがかなり多かった。

また本年も７月下旬にまき網によるスルメイカの漁獲が始まり、８月一杯操業したが、漁獲量は昨年の約5,300トンを更に下廻る約4,745トンであった。

魚体は、３歳魚（2010年級群）、２歳魚（2011年級群）主体に、１歳魚と幅広い組成であった。

また、本年のブリ（イナダ、ワカシ）の漁獲は、昨年同様10、11月にピークがみられた。水揚量は、昨年の半分になったが近年では高い水準であった。

常　磐

この海域は、放射能漏れの影響で操業を回避した海域が含まれており、本年も操業がかなり制約された。本年の越冬サバ漁はやや好調に推移し、27.3千トンの漁獲で前年（44.8千トン）をかなり下回った。

また、春（５～７月期）の北上期の漁獲はで12.1千トンと前年（12千トン）並みであった。南下群の漁獲は40千トンで前年（49.5千トン）を下回った。

なお本年も北部太平洋海域では資源回復計画に基づく休漁も多かったが、今期は全シーズンを通してやや低調な漁に終わった。

なお、本年のブリ類（イナダ、ワカシ）の漁獲は、年明け後と年末12月に集中してみられ、近年では最も多い水揚げであった2011年に比べてもかなり多かった。

魚体は、越冬群はほぼ２歳魚（2011年級群）主体に１歳魚(2012年級群)であったが、北上期には２歳魚（2011年級群）、１歳魚（2012年級群）主体、南下期は、当初の３歳魚(2010年級群)主体に２歳魚（2011年級群）、１歳魚、後半には、１歳魚、２歳魚主体に３歳魚も混

じりで漁獲された。本年も越冬期、南下期にゴマサバの混獲が目立って多かった。

東　海

伊豆諸島周辺を主漁場として、主に産卵群を対象とするサバタモ抄い漁業は、昭和54（1979）年の17.7万トンをピークに減少しており、近年においても概ね1万トン以下の低調な漁獲が続いている。また操業隻数も往時に比べ大幅に減少しており前年200隻を割ったが、本年は増加の323隻であった。なお隻数の減少もあってか、１隻当たりの水揚げは、特にゴマサバはデータを取ってから最高であった。なお本年の総漁獲量は6,065トン（前年：2,616トン）で前年を大きく上回り、10年前の水準になっている。

25年の漁獲量は、マサバが2,402トンで前年（2,145トン）を上回り、ゴマサバも3,663トン（前年： 471トン）でゴマサバの減少が目立った。

東　シ　ナ　海

25年前半の年明け後の冬漁は前年より低調で昨年を下回り、夏場の閑漁期の漁も前年並みであった。９月以降本番に当たる冬の盛漁期には前年同様12月にややまとまった程度で、前年を下回る水揚げに終わった。したがって結果的には昨年をかなり下回る水揚げに終わった。

山　陰

この海域で漁況は、年明け後の漁が九州同様前年を下回り、閑漁期の夏場の漁は前年以上に低調な漁、しかも秋以降の漁も前年を大きく下回る漁に終わったことで、その結果水揚げは前年を大幅に下回った。

魚体は、2012年級群が主体であった。

輸　入

本年の輸入量は、5.5万トンで、前年（4.8万トン）を上回った。本年のノルウェーからの搬入は、現地価格の高騰や円安による搬入コスト高ともあって、本年の搬入ピークは昨年同様12月に集中した。

主要な輸入国は本年も依然ノルウェーのシェアが92%と高く、昨年90％を割ったが本年は再度90％台に戻した。また、それ以外の国では中国が1,715トン（前年：2,614トン）とかなり減少し、アイルランド、カナダ、がそれぞれ641トン（前年：1,363トン）、58トン（前年：241トン）で減少、唯一アイスランド1,469トン（前年：932トン）と引き続き伸びが目立った。

本年のノルウェーからの輸入原料は600gサイズ以下が98%（前年:95%）主体に600gUPが2%（前年:5%）で、シェアでは600gUPが本年も更に減少しており、本年も600g以下が更に増加している。また600gUPサイズでは日本とオランダ等諸外国との競合関係があるが、数量が少なく高値が続いていることでロシア等の諸外国は殆ど買っていない。本年は、ノルウェーサバを巡っては600gUPサイズでは、買付価格の日本側の優位（1－6クローネ他国より高く買っている）がシェアは最も多いが、その率は25％まで落ちてきている。

価格は、227円で前年（213円）を現地価格の高騰によりやや上回った。

また、サバは中国（約6割）、タイ（約３割）等海外加工が依然活発にみられ、製品輸入も多い。しかし本年は、12,450トンで前年（11,778トン）を引き続きやや上回った。

輸　出

本年の輸出量は、国内生産の減少の割には、再度11.3万トンで前年（10.7万トン）をやや上回り、かなり震災前の水準に近づいてきた。

本年はエジプトへの輸出が回復したことで、再度トップ（2.8万トン）の座に返り咲き、続いてタイ、ベトナム、フィリピン、ガーナ、マレーシア、中国、インドネシア、ケニア、モザンビークの順に変わったが、依然東南アジア諸国の伸びが大きいのと、アフリカへも伸びているのは変わらない。また、缶詰輸出は3.1千トンと再度前年（4千トン）を下回った。

在　庫　量

月平均在庫量は、5.5万トンと前年（6.8万トン）を下回った。

これは、輸入量の減少があったものの、国内生産の減少・輸出量の増加がより大きく反映された結果である。

消費地入荷量と価格

25年の東京消費地入荷量は、生鮮が1.1万トンと前年（1.2万トン）やや下回った。

また、冷凍は3.3千トン（前年：3.2千トン）、塩干2千トン（前年：2.3千トン）、塩蔵0.3千トン（前年：0.4千トン）であったが、本年は国内生産が減少したことで、鮮魚での消化が鈍り、一昨年震災の影響で日持ちのする製品の需要が出た塩蔵、塩干品は通常のベースに戻り扱いは今年も前年を下回った。冷凍は本年も変化なくほぼ前年並みであった。

価格は、生鮮345円（前年：331円）、冷凍469円（前年：482円）、塩干533円（前年：525円）、塩蔵494円（前年：469円）で、前年同様冷凍原料がノルウェー物の高騰で国産物の扱いが多くなり若干下げたが、その他生鮮、塩干、塩蔵は入荷の減少に左右された結果となった。

また、本年も消費地市場、末端のスーパー・量販店では、時期によってはゴマサバが恒常的に販売されるようになり、鮮魚販売や、缶詰を含む加工品にもかなり利用・定着している。なお消費支出をみると数量がやや減少、金額が前年並みであった。